

人生100年時代とインフラ



小林 潔司

土木学会 第106代会長

新しい年度が始まりました。新しい職場や学びの場で、これから新しいことにチャレンジしようとする方も多いと思います。おめでとうございます。

人生100年時代といわれます。人間の寿命が延びることは、多くの先進国に共通に起こっている世界的な現象です。長寿社会を高齢化社会と呼び、問題視することがありますが、それは文明の大勝利についての悲観的見解に過ぎません。人類が長寿になったことは誇るべきことであり問題であるはずはありません。

最近、老年学（ジェロントロジー）という言葉が耳にするようになりましたが、長寿になったことが個人や社会に何をもたらすのかに関して、学問的にあまり議論が蓄積されていません。しかし、人

びとが経験を蓄積し、新しい拡大された選択権を行使し、社会に影響を与える前例のない機会を有するようになったことは事実です。

ノーベル経済学賞を受賞したセオドア・シュルツは、人間資本の理論を展開し、人の福祉は、結局のところ自分自身への投資の問題だといいました。人間資本とは、人が獲得した能力や知識・技術などを意味します。これを入手するには費用や時間の投資が必要ですが、一度獲得すれば健康である限り、それを生涯にわたり利用できます。起業家精神であれ、技能や学校教育の成果であれ、それを使える寿命が延びれば、それだけ人間資本の価値は大きくなります。

19世紀末、欧米諸国の平均寿命はわずか49歳でした。高い乳幼児死亡率と伝染病などの疾患が原因



でした。これらを原因とする死亡率は、医学の進歩により20世紀前半までに激減しました。現在大きな潮流として実現しつつある長寿社会の到来は、防災・安全性の向上、上下水道の発達、公共サービスの整備など、家庭生活をとりまくインフラの充実によるところが大きいと思います。医学や工学の発展がインフラとして結実されたことによって、今日の長寿社会が実現したのです。

健康も一種の人間資本です。すなわち、人は、健康資本を用いて生産、消費、余暇活動を行う。健康資本のストックの一部は親から相続したものであり、一部は自分で獲得したものです。残念ながら、健康資本は人それぞれによって平等ではありません。現代医学の発展は難病を克服し、すべての人の健康資本の改善に貢献してい

ます。一方、インフラは、公共財として人の健康資本形成に重要な役割をはたしています。人間資本の形成を通じたその経済効果は計り知れなく大きいと考えます。

戦後のインフラ整備は、われわれに長寿をもたらし、高度な人間資本の形成に貢献しました。日本人の平均寿命は、一貫して世界のトップ水準を維持しています。その原因はいろいろありますが、質の高いインフラストックが日本人の長寿化に貢献しています。日本人の健康資本ストックをさらに増加させ、ハンディキャップの有無やライフパターンの多様性に関わらず、すべての日本人が「よりよき社会」を享受できるように、インフラの質を向上することが求められています。それは、世界における長寿先進国である日本の使命であります。